バラで華麗に、マッシュルームに驚いて、いちごが腹に染み渡った日

皆さんは土を使わず、すばらしいバラの花がつくれると思いますか。南国市にマッシュルームを栽培している会社があることを知っていますか。西島園芸団地のいちご狩りは体験しましたか。

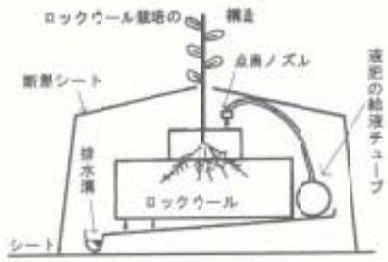
今回の南国再発見は、なんだか楽しい、ちょっと珍しいものの栽培を、広報委員が取材しました。

いちご狩りを楽しむ親子（西島園芸団地で）

南国のバラ

建設中のオフィスパークの近くに徳橋昭俊さんがバラを栽培する温室がある。徳橋さんはバラひとすじ二十五年、現在「日本ばら切花協会高知県支部」支部長も務めている。栽培面積は三十六㌃、うち十㌃をロックウールで栽培している。市内では数年前からバラのロックウール栽培が導入されており、現在百十五㌃の面積がある。

徳橋さんがロックウール栽培を始めたのは二年前。長期間栽培を続けると生育が悪くなり、収穫本数が減少してくる。そこで目をつけたのが、地面と切り離して作るロックウール栽培であった。



温室内でバラを見つめる徳橋さん

ロックウールとは、原料の鉱物を高温（千五百度）で溶解後、綿状に繊維化し、幅三十㌢、高さ七㌢、長さ九十㌢ぐらいのブロック状に成形したもの。それに植え付け、溶液で栽培する（上図参照）。そのため温室内は全面シートで覆われており、土はまったく見えない。

ロックウール栽培は安定した収量が得られ、自動化が容易で栽培管理の省力化が可能なことなどがそのメリット。しかし、導入時の初期投資が大きいので普及率は低い。

大型のガラス温室でクリームピンク色の「アリアンナ」という品種を手に「ガラスは光の透過性が良いため、同じ品種でもビニールハウスで栽培したものより、明らかに品質が良い」と、自信を示す。近年増加している輸入花きに対しても「品質は国産がはるかに上、負けることはない」と言い切る。「買ってくれた人が満足し心豊になってもらえるような『よいバラ』を作りたい」と、今後の夢を語ってくれた。

マッシュルームが南国市で栽培されているのを知っていますか？

南国きのこファームという会社が領石にある。須崎出身の今橋勝馬社長はみかん農家から転身し、九年前当地でマッシュルーム栽培を始めた。

化学肥料や農薬は使用しない四国唯一つのマッシュルーム工場。現在の生産目標は、月産十二㌧、月の売上げ一千万円とのこと。陸、空の玄関である南国市から県内外へ出荷されている。

今橋社長の甥であるスティーブさんは、カナダ生まれの日系二世で、マッシュルーム栽培に関してのスペシャリスト。今回に六社ある工場に技術指導に出向くなど、広範囲で活躍しているとのこと。

マッシュルームの原産地はヨーロッパ、品種はホワイトとブラウンの二種類があり、きのこファームでは栽培面で扱いやすく、日持ちの良いブラウン種のみを栽培中。

植物でも、動物でもない菌類のきのこ。ある本によると国内には、約四千種が自生し、食べられるものが百二十種。このうち栽培可能な十種類が私達の食膳にのぼっているそうだ。きのこの中でも、マッシュルームはタンパク質が多く、ビタミンB2を多く含む健康食品で、おまけにノンカロリーといいことばかり。最近では、子供や若者に人気のピザにかかせない材料で、料理方法もたくさんあり楽しい。スパゲッティ、シチュー、グラタン、ピラフ、炒めものやサラダなど。

マッシュルームづくりに使用された堆肥は、このように循環、リサイクルされています。

仕事さん以下従業員の皆さんが愛情を込めたマッシュルーム栽培は、やっぱり農場の雰囲気。そこにファクトリーではなくファームとこだわったネーミングが想像できた。

マッシュルーム栽培を見学してみたいグループは、一週間くらい前に電話予約すればOKとのこと。ぜひ一度行ってみませんか！

（申し込み先 ☎㊀㊀2033）

今橋社長（左）とスティーブさん

体験いちご狩り

いちごの赤をしみじみとながめると、なんでこんなにきれいなんだろうと思う。苗を少し買ってきて、楽しみに育て色づいてくるのを待ちに待って食べる一粒。甘酸っぱく幸せな気分が広がる……。

いやいや現実はさにあらず。なめくじやアリに半分食べられたいちごばかりで、完全ないちごなんて数えるほど。それがなんと、西島園芸団地のいちごハウス、見渡すかぎりのいちごの水耕栽培。上下二段にまっ赤ないちごが、それも完璧ないちご（！）が見事に並んでいるではありませんか。盛りのときは一度に三百人くらい入って食べてもらえる量だそうである。入り口でもらった白いお皿、これは食べ終えたヘタを入れるためのもの。

とにかく、うれしい。おいしい。大きいいちごに挑戦。次は小振りのでいこうか。これは、ちょっと熟れが足らんかな、これはいけそう、としばらくは夢中。

経営者の一人、中沢さんも、そこは見越してまあまず食べてくださいとニコニコ。若いカップルや親子連れが多いとのことで「子供はまっこと好きですねえ」と感心した口ぶり。確かにおじさんにいちごは似合わない。デートコースに選んだ若い二人に聞くと、「すごくおいしいし楽で満足。友達にもすすめたい」と、のんびりといちごを口に入れながら歓策という感じで楽しんでいた。強酸性水で病気の発生をおさえているとのことで、いちごをプチンともいでパクッと食べられるしあわせ……。

食べ終えてヘタの数を数えるのも楽しかった。西島園芸団地のお客さんが増えているというのもうなずけるいちご狩りの取材だった。